

論文の内容の要旨

論文題目 **Ekphrasis and the Relationship of the Self and the Other**
エクフラシスと自己と他者の関係(要旨)

氏名 長谷川 弘基

エクフラシスの定義は必ずしも定まっていないが、この 30 年ほどの、主に英語による研究での定義は “the verbal representation of a visual representation”(Heffernan), “the poetic description of a pictorial sculptural work of art”(Spitzer) というもので代表される。以下の研究では、エクフラシスを暫定的に「造形美術作品の詩的描写」と定義した上で、エクフラシスに自己と他者の関係が反映されているという Mitchell の指摘に注目し、実際に Wordsworth、Keats、Yeats、Hughes による個々のエクフラシス作品を分析する。エクフラシスに表される言葉とイメージの関係が、自己と他者の関係と著しい類似があるという Mitchell の主張を確認するためにも、また、実際にエクフラシス作品に認められる情緒が自己と他者の葛藤を反映しているということを確認するためにも、以下の研究ではエクフラシスとエクフラシス以外の詩との間の相関性にも十分な注意が払われる。

一般にエクフラシスの分析においては、

1. 言葉が(視覚イメージの描写を通して)自ら静止したイメージになりたい
2. 静止した視覚イメージを(描写を通して)動かしたい

という二つの、正反対のベクトルを持つ欲望が指摘される (Krieger)。しかし、この第 1 の動

機はそのまま詩の一般則ともなりうるものである。芸術作品とは押しなべて「静止した、確固とした一つの世界」を築こうという営みの反映に他ならない。また、第 2 の「静止したイメージを動かしたい」という欲望も「作品を解釈したい」という一般的な「欲望」に吸収されるように思われる。事実、美術作品の描写には解釈の問題が根本的に関連している。描写の対象が「作品」であるがゆえに、その対象に「意味」が込められていることが当然視される。エクフラシスの過程はこの視覚的に表された意味を読み解く過程であるとは言い得る。しかし、解釈の問題もまたエクフラシスにのみ固有の問題ではないことは明らかである。このように、エクフラシスとは何か？という問いは非常に捉えがたい。むしろ、問題の焦点を「エクフラシスが提出する問題は何か？」と置きかえることにより、興味深い論点が浮かび上がる。

エクフラシスの定義が必ずしも厳密ではないにもかかわらず、文学(詩)と美術(視覚イメージ)の関係は詩人のみならず研究者の注目を集め続けてきた。これまでの研究のタイプは大まかに以下の三種類に分類できる。

1. ある文学テキストとそれに対応する美術作品の比較研究
2. 記号論的研究(言語的記号体系と視覚的記号体系の比較)
3. 現象論的、あるいは文化論的研究

エクフラシスの問題に取り組むとき、最も有効であろうと目されるのが第 3 のアプローチである。このアプローチを代表する研究者である Mitchell は、エクフラシスの中に以下の三種の相矛盾する相を認める、

1. 視覚イメージを言葉によって描写(再現)することは無理であると認める冷静さ(ekphrastic indifference)、
2. それにもかかわらず、想像力や比喻によって視覚イメージの再現が可能であるという期待(ekphrastic hope)、
3. 視覚イメージが(比喩的に)言葉によって再現されんとするときに生じる奇妙な反発、言葉は視覚イメージを追求すべきでないという訓告的態度(ekphrastic fear)。

以上のような相異なる相をエクフラシスに認めた上で、Mitchell は、エクフラシスに認められる「期待」や「恐れ」には、我々が他者を表現しようとする、あるいは他人と交じり合う際に感じる不安が表現されていると言う。そして、エクフラシスが実際にしていることは、この他者に対する相矛盾し

た感情を、様々な二項対立を通して、表すことであろうと述べる。

エクフラシスに「他者」に対する態度の反映を見ようとするアプローチの最大の利点は、「言葉によって視覚イメージを再現すること(言葉が絵になること)は不可能である」という常識的な事実を前にして、なおも視覚イメージを描写するエクフラシスが特別に興味深い現象と見なされ続けることへの一つの理由付けを与えることにある。言葉が視覚イメージを描写すること自体には、冷静に考えれば、視覚イメージを描写しているという即物的な事実以外には何ら特別なことはない。それなのに、なぜ視覚イメージは言葉との鋭い二項対立にさらされるのか？ なぜイメージはしばしば女性化されるのか？ なぜイメージは、実際に豊かな意味を持ちながらも、「沈黙している」と見なされるのか？ 答えは、言葉とは明らかに異なった表現様式を持つ視覚イメージが、言葉と異なっているがゆえに、典型的な「他者」と見なされているからである。言い換えれば、エクフラシスが提出する興味深い問題の一つとして、「言葉が視覚イメージを描写することに何か特別な意味があると考えられてきた背後には、言葉とイメージの関係を自己と他者の関係の反映として受け止めてきたイデオロギーが横たわっている」ということをエクフラシスがあからさまに示しているという論点がある。

Mitchell の問題提起の意義はここにある。

エクフラシスを他者との関わりで理解することは、実際にエクフラシス作品の読解を深めることに貢献し、なおかつ、エクフラシスの分析を通して確認される他者への複雑な情緒は、詩人の実際の他者に対する関心・態度に新しい光を当てる。Wordsworth のエクフラシスは、詩人が他者としてのイメージを完全に把握していることを示し、このようなエクフラシスではイメージから「他者性」が完全に消え去っている。それが詩人の「エゴティズム」と密接に関連していることが明らかになる。この Wordsworth の「エゴティズム」に反発した Keats は、これとは対照的なエクフラシスを残し、彼のエクフラシスではイメージは理解不可能な「他者」として留まり続けている。Keats の “Negative Capability” や *Lamia*、 “Belle Dame” における自己と他者の扱いを並べて考えるとき、Keats が他者の他者性、理解不可能性を積極的に尊重したことがはっきりと指摘できる。

Keats の詩における「エゴティズム」の否定の意義は十二分に評価できるにしても、彼の立場は半ば必然的に「距離を置いた観察者」、「対象(他者)に近づけない自己」のものになる。Wordsworth のエクフラシスがあまりに強引に「他者」について語る一方、Keats のエクフラシスは他者の他者性を強調するあまり、エクフラシスの根拠そのものを危うくしかねない問いを引き寄せる。つまり、イメージが言葉によって完全に捕捉される(描写される)ことがないとわかっているのに、な

ぜそのような不可能な企てを図るのか、という問いである。Mitchell の言う、*indifference* と *hope* の問題でもあり、同様の問題に Krieger も注目している。

エクフラシスが不可能だと知りながら、それでもなおエクフラシスを行うというこのディレンマを説明する鍵を Yeats のエクフラシスが提供する。Yeats のエクフラシス、とりわけ肖像画を扱った詩は詩人のイメージに対する「責任」という側面を明らかにする。絵に描かれた他者を言葉で再現することは不可能である。しかし、彼にはその責任がある。エクフラシスを支える動因の一つに、Krieger の指摘した「静止したイメージを動かしたい」という欲望と関連して、たとえ他者を完全に捕捉することが不可能であってもなおもその他者に向かって働きかけねばならないという「他者に対する責任」というものが考えられる。他者の他者性と、それにもかかわらず他者について語らねばならない責任が最も顕著になるのは、その他者が死者である場合であろう。死者の肖像画を題材とした Yeats のエクフラシスは、静止したイメージ、閉じた空間、沈黙した他者、不在というエクフラシスに付きまとう特徴を端的に示している。Yeats は他者との間の埋めがたい距離を十分に意識した上で(この点では彼は Keats と同様である)、Keats のエクフラシスには見られない積極性を発揮して、この無限に遠い他者へ言及する。

エクフラシスが自己と他者の関係を反映し、かつ他者としての死者の記憶とも密接な関係があることをいっそうはっきりと示すのは Hughes の *Birthday Letters* である。この詩集は、これまでのところもっぱら詩人の伝記的な側面にのみ注目して語られることが多いが、エクフラシスと他者という視点から分析すると、この作品の意義が明らかになる。実際、ほとんど全ての詩が I と you の関係に言及し、しかも数編の極めて興味深いエクフラシスが含まれている。Yeats のエクフラシスで確認したイメージとしての他者＝死者に対する責任はここでも重要な働きをするが、同時に、他者への恐れ、あるいは逆に他者の蹂躪といった極めてエクフラシス的な感情の振幅が確認できる。*Birthday Letters* の解釈を通して、エクフラシスを自己と他者の問題と関連させて考えることの有効性が示される。エクフラシスを通して見えてくるもの、少なくともその一つ顕著な特徴は、描かれた視的イメージの姿というよりも、むしろ「見るもの」と「見られるもの」との間の距離、関係である。